

(岩波茂雄 『言論は日本を動かす』 (「講談社-1985.11.25

【第⑦巻】

言論を演出する

【解説—柏谷—巻】

言論は

日本を動かす

【著者】

内田健三

柏谷一香

丸谷正

三谷大郎

山崎正和

【池辺三山】—内田健三

【黒岩涙香】—山本夏彦

【堺利彦】—井田龍六

【野間清治】—渡部武

【岩波茂雄】—中島健雄

【高濱虚子】—松岡利彦

【正力松太郎】—中山隆

【松本重治】—木田寛次

【吉田秀雄】—小谷正

【池島信平】—寺島利

な勘や感動を基礎としており、すぐれた言論の創造に役立つ環境づくりこそ理想であらう。
しかしまた、そうした環境づくりにいかに多くの先人が血を流してきたかを省みるとき、そこに言論を生み出す混沌と人間ドラマがあり、ジャーナリズムが自覚的に取り組むべき主題があることを主張することも許されるであらう。

目次

解説 柏谷一希

【池辺三山】 内田健三 3

【黒岩涙香】 山本夏彦 33

【堺利彦】 井出孫六 63

【野間清治】 渡部昇一 93

【岩波茂雄】 中嶋嶺雄 123

人が悟るよう助けるのが国民大衆相手の出版社の理想であると彼は考えていたのである。今の出版界にかくの如き信念を有し、その信念を出版事業上の成功に結びつけうる人ありや。私は講談社の出版物に囲まれて育った自分の少年時代を懐しく回顧すると共に、今日の育ち盛りの者たちにいささか同情の念を禁じ得ないのである。



【岩波茂雄】
——中嶋嶺雄

【岩波茂雄—略年譜】

- 一八八一（明治14）年 八月二十七日、信州諏訪郡中洲村中金子に生まれる。
- 一九〇一（明治34）年 一高に入学、ここで阿部次郎、安倍能成らの友人を得た。
- 一九〇四（明治37）年 人生問題で煩悶、一高を除籍さる。
- 一九〇五（明治38）年 東京帝大哲学科の選科生となる。
- 一九〇七（明治40）年 ヨシ夫人と結婚。翌年、大学を卒業、この年、母を失う。
- 一九〇九（明治42）年 神田高等女学校の教師となる。
- 一九一三（大正2）年 教師をやめ、神田南神保町に古本屋「岩波書店」を開業。
- 一九一四（大正3）年 漱石『こゝろ』を刊行。出版の土台を築く。
- 一九一五（大正4）年 『哲学叢書』（全12巻）を刊行。
- 一九一七（大正6）年 『漱石全集』（全14巻）の刊行開始。書店の経済的基盤をつくった。
- 一九二一（大正10）年 雑誌『思想』発刊。
- 一九二七（昭和2）年 岩波文庫創刊。
- 一九三八（昭和13）年 岩波新書を発刊。
- 一九四〇（昭和15）年 津田左右吉の『古典記及日本書紀の研究』など四著の出版で起訴され、昭和十七年、禁錮二年、執行猶予二年の一番判決を受ける。
- 一九四五（昭和20）年 貴族院議員補欠選挙に立候補、当選。
- 一九四六（昭和21）年 安部能成に託し『世界』創刊。文化勲章受章。四月二十五日、病死。享年満六十四歳。

イメージのなかの岩波茂雄

「岩波文化」の現在に照してあえて言葉を探すなら、現代日本の「歴史」を語るうえで、その編纂者・オルガナイザーとしての岩波茂雄を欠くことは絶対にできない。大正から昭和前期にかけてのわが国の言論界が、いわゆる論壇から文壇を貫いて、岩波茂雄という豪快で奔放な、それでいて実にきめ細かい配慮を怠らなかつた演出者によって、そのもっとも輝かしい知的成熟を見たことは、誰もが首肯せざるを得ない一つの同時代史である。

一九一三（大正二）年に当時三十一歳の岩波が神田南神保町十六番地の電車停留場前に正札販売の古本屋を開業して以来、岩波書店は今日なお健在であり、終戦直後の一九四六（昭和二十一年）年に岩波が満六十四歳で没してからは、いわゆる進歩的文化人の拠点として並び立つ者のない存在であった。岩波亡き後の岩波書店が果たして岩波茂雄本来の包容力と豊かな感受性そして大正・昭和前期の教養主義が内に秘めていたロマンティズムを継承する受皿であり得たかどうかという決定的に重要な論点をとりあえず捨象するならば、岩波茂雄は今日でもなお、わが国の言論界にはかり知れない遺産を保持しているといえよう。

このような存在としての岩波茂雄にかんしては、これまでも幾度となく語られ、論じられ、追想されてきた。生前岩波がもっとも信頼した友人、安倍能成が心血を注いで書き残した正伝としての『岩波茂雄傳』（岩波書店 一九五七年）や岩波に仕え、女婿となり、岩波書店社長もつとめた小林勇の外伝『惜襟莊主人——一つの岩波茂雄伝——』（岩波書店 一九六三年）のほか、数多くの回想や伝記的文章があり、近くは谷川徹三氏の珠玉のような小伝『岩波茂雄』、『讀賣新聞』一九八五年四月五日～十二日付『百年の日本人』もある。それだけに、私のように生前の岩波を知らず、またいわゆる「岩波文化」とも距離のある戦後世代の者が、岩波茂雄を論ずるなどということは、本来、差し控えるべき事柄であろう。

実際、私自身は今回、このような企画に誘われることがなかったら、おそらく岩波茂雄という八方破れの個性的な言論人の足跡に生涯接することはなかったであろう。それほどまでに岩波は私にとって遠い存在であり、ただ同じ信州人として郷土自慢の話題のなかに、ときには登場したにすぎない存在であった。だが、それも私の郷里の母校の大先輩でもある古田晁・唐木順三・臼井吉見という筑摩書房の担い手であった知識人に比べれば、岩波茂雄は私にとってはるかに馴染みの薄い存在であった。もとより私は、少年期から今日にいたるまで「岩波文化」の恩恵を全面的に受けており、雑誌『世界』は私の新制高校生時代からの知識の源泉であったばかりか、大学時代は私の下宿に並ぶ岩波

新書の数多きことに驚いた友人たちから「新書派」などというレッテルを賜ったこともある。

しかし、六〇年安保の激動の時代を経て、私にとつての「岩波文化」は、遠くに見る影絵のような存在に急速になっていった。戦後「岩波文化」の「顔」であった清水幾太郎氏の岩波書店との関係の変化を近くで目撃していたからかもしれない。いずれにせよ、私にとつての岩波茂雄は、そのような戦後の岩波書店の航跡を通じての岩波でしかなく、それは進歩的文化人や左翼的知性を動かし、彼らに最大限に迎えられた理窟っぽく神経質で線の細い出版人、私があまり好きではないタイプの信州人として、岩波茂雄は私の胸中にかすかな影を落としていたのであった。

だが、このような私のイメージがまったく誤ったものであることを、今回、私は一つの衝撃をもって初めて知った。私の先入観は、岩波自身の著作『茂雄遺文抄』（私家版）岩波書店 一九五二年）や『出版人の遺文——岩波書店 岩波茂雄』（栗田書店 一九六八年）を今回精読したときに粉々に打ちくだかれ、前記の伝記類や数多くの回想録を読みすすむうちに、まったく違った岩波茂雄像がたちどころに私の内部に形成されていったのだ。

加えて、岩波茂雄の生前の風貌や筆跡に触れるに及んで、私の岩波像はますます明確になってきた。それは、私が戦後の岩波書店と「岩波文化」の現在から演繹したイメージとは決定的に異なる人間像であり、親愛感であり、また敬慕の念でさえあったりする。そして私は、この岩波茂雄の人間性

もロマンも、またその幅広く奔放な思想的な水脈も、今日の上品で神経過敏で高級官僚的でさえある「岩波文化」と岩波書店には、いささかも継承されていないのではないかという苛立たしきに取り憑かれ、同時に亡き岩波の遺志はいずれ、と問わざるを得ない衝動に駆られる。

もしも私のこのような感懷に異を差しはさまれる読者があるならば、一貫して「文化の配達夫」たらんとした岩波が戦前、『日本資本主義發達史講座』を刊行して、岩波書店がいわゆる講座派知識人の拠点と目されながらも、岩波自身はみずからの意志によって明治天皇の「五箇条の御誓文」を戦時中とはもとより、終戦直後に病に伏して死にいたった時期の枕辺にも掲げ通した人物であること、また国士・頭山満翁を尊敬しつづけ、頭山を「左右兩翼を超越して天地の大義に生きる國寶的存在」と讃美していること（前掲『岩波茂雄傳』三四三ページ）、また、友人の原田熊雄が昭和十八年十一月岩波に「君の処は面白いぞ、漱石の写真と頭山満の写真が睨み合ってるし、西田（幾多郎）先生を奉ってるかと思うと石原莞爾とも仲が良いいし、ハッハッハ……」と冷かしたところ、岩波は「君は石原という男を知らんからそういうが、あれは只の軍人じゃないヨ」とムキになって弁解していたというエピソード（『高木惣吉日記 日独伊三国同盟と東条内閣打倒』毎日新聞社 一九八五年 一三六ページ）、さらには孫文のみならず蔣介石にも傾倒していて、斎藤茂吉からは「なぜ岩波さんが蔣介石にそんなに力瘤を入れるのかわからなかった」と言われたこと（前掲『岩波茂雄傳』三六〇ページ）などを知っていただき

いものである。そして、あの骨太で頑固一徹しかも心のやさしそうな岩波の顔写真を是非一瞥されたい。谷川徹三氏は、その風貌をかつて、「あの顔の大きな面積や、クリクリの坊主頭をふくめた全體の線の強さや、真中にどつかとあぐらをかいてゐる鼻や、いつも少し充血して正面を見据ゑてゐる眼や——道具が大ききせいか、堂々としてゐた。文壇上人の有名な畫像があるけれど、あれとか、でなくとも禪門の頂相の中にわれわれは時々似た顔を見ることがある。豪傑と云つても、やはり戦士のそれとはちがふので、豪僧と言つた面影が一番濃い。私はあの顔が好きであつた」（『鬼の押出し』「心」第三卷第十二號（一九五〇年））と描写し、いまた、「岩波さんは魁偉な風貌をもっていた。顔の面積が大々として大きく、それがまた筋肉質で、顔面のあちらこちら突兀（とつこつ）があつて、全体の輪郭がいかに強い。それを顔の真中にどつかとあぐらをかいた鼻が引き締めている。昭和の初め、夏の北軽井沢大学村の悪童どもは、鬼の押出しというあだ名を奉っていた。私はその顔が好きであつたが、岩波さんはその堂々たる風貌に似合わず、いつも忙しそうにせかせかしていた」（『岩波茂雄①』『讀賣新聞』一九八五年四月九日）と追想している。

たしかに、岩波茂雄の風貌は、このとおりである。それこそ、あの土くさい信州人の武骨な顔、それでいて多感な旧制中学生そのままのロマンティズムと人文主義への憧憬を生涯持ちつづけているといった夢多き信州人の顔なのである。こうして岩波茂雄は、私にとってもっとも親しむべき人物と

して、今日存在する。

その思想と行動

岩波茂雄の人物評では、彼は「中学四年生の気持」（谷川徹三）を生涯持ちつづけた人物であるとか、「だだっ子的非合理的本性」（安倍能成）を晩年になっても発露させていたといったことがしばしば指摘される。そうであるだけに、岩波の思想と行動の軌跡をたどるうえでは、その幼少年期から青年期の多感な人間形成期に是非とも焦点を当てねばならない。

岩波はその自分史を彼自身の回顧録「回顧三十年」（『日本読書新聞』一九四六〇昭和二十一年三月、五月、前掲『出版人の遺文』所収）や岩波書店創業三十周年のときの「回顧三十年感謝晩餐会の挨拶」（『図書』一九四二〇昭和十七年十二月号、同）でかなり克明に語っている。ここでは、岩波自身のこのような回顧に加えて、数多い友人、知人の岩波像を参照しつつ、若き日の岩波の思想と行動の航跡をまずたどってみよう。

岩波は、西南戦役もおさまって維新の大業がほぼ完成し、薩長の勢力が動かしがたいものとなりつつあった明治十四（一八八一）年八月二十七日、信州の諏訪郡中洲村中金子に生まれた。「私の生家

は信州の中洲村で、年貢米が百俵ほどとれる、まあ田舎では中以上の家でした。父は体が弱かったのでも百姓仕事はせず、役場の助役をつとめていましたが、私が十六歳の時、亡くなりました。突然父に死なれて、私は勉強も手につかず、半年くらいはぼんやりしていました」「母は学問はありませんでしたが、大へん活動的な人でした。男まさりの気性で、村のいざこざなど一人で世話をやいたり、愛国婦人会の支部創設に骨折ったり、よく村のために尽くしました。また、正しいことはどこまでも押し通して行く誠実な人間でした」と岩波自身が語っている（前掲『出版人の遺文』）。彼は、村の尋常小学校から高等小学校に進み、十四歳で諏訪実科中学校（のちの諏訪中学校、現在の清陵高校の前身）に学ぶのだが、少年時代は機敏な腕白少年であり、同級生からは「茂雄さ（茂雄さん）のこすさ」ともいわれた。

中学校に入学した当時は、日清戦争直後の英雄崇拜の風潮のためか、また明治維新の余波に揺れていたためか、西郷南洲や吉田松陰を崇め、同時に英語会話にも精を出したというが、やがて郷土の大先輩、佐久間象山に傾倒する。

このあたりの航跡は、信州人に見られる一つの典型だともいえよう。信州人は、あの山国にあって孤高を保ってきたのだが、結局、明治維新の大業、ひいては日本の近代化に政治的・行政的には参与し得なかった。それだけに日本の近代化を政治的・行政的に担った薩長勢力へのコンプレックスを、

やがて学問や教育の道において結実させようと奮闘するのだが、岩波にとって象山は、そのような歩みの彼方に見えるシンボルでもあったのだ。この点では臼井吉見が描く『安曇野』（『全集』筑摩書房一九六五～七四年）の群像とも共通しているといえようが、彼らが常念岳や鎗・穂高の北アルプスの山の峻厳に育まれたのとは違って、岩波は富士山が好きだった。のちに大学（東京帝国大学哲学科選科）を卒業後、神田高等女学校に奉職し、三年間で辞してのち岩波書店を開業するまでのあいだに彼は富士山麓で晴耕雨読の生活を送ろうと思いついたこともあったという。岩波のこのような富士山好きについては、後年に岩波がバトロンとなって経済的にも支援した新劇の山本安英女史も、「岩波先生は富士山をとて愛していらっしやいました」（『岩波先生のこと』、『図書』第九十八号～一九五七年）と書いている。岩波が生まれた中洲村中金子は、諏訪湖西岸、「御柱」で有名な諏訪神社上社のあるところであり、私も松本への帰省の折にいつも車で通るところだが、あのあたりからは諏訪湖を隔てて遠くの富士がよく見える。その富士山を愛したというあたりに、他の信州人とは異なった岩波のハイカラ好みが映し出されているのかもしれない。

そのような岩波にとって、父の死は大きな衝撃であったが、しかし同時に岩波が生涯敬慕した母親の慈愛はそのような逆境において岩波を発奮させた。母は岩波が学問を続けることに理解を示したばかりか、当時十七歳の少年に村の伊勢講代表として長途の旅に出ることも許してくれたのである。多

くの信州人がそうであるように、このとき岩波は二見ヶ浦に出て初めて海を見る。ついでに彼は京都にも立ち寄って象山の墓に詣で、さらに神戸から船で鹿児島まで行って西郷の墓参りもするのだが、途中で西洋人に会って英語で話しかけてみたりするといった岩波の積極果敢な精神はこの時期にもすでに発揮されている。岩波は功なり名を遂げてのちの昭和十年四月から年末にかけて、上海、香港、シンガポールから東南アジア、インド洋、スエズ運河を経てカイロに至り、イタリア、フランス、ベルギー、オランダ、スイス、ドイツ、イギリスからさらにポーランド、チェコ、ハンガリー、オーストリア、ソ連、フィンランド、ラトヴィア、エストニア、それにスペイン、そしてアメリカ東部から西部、ハワイへと世界一周の旅に出かけ、この間、「ルーブルの里を尋ねて心たれり芸術の極み見れど飽かぬかも」といった歌も詠じているのだが、当時としては大変な大旅行であって、このような貪欲さは、少年時代からのものであったといえよう。

このように多感で積極的な少年であった岩波は、父の死後、「身を立て、道を行い、名を後世に掲げ、以て父母を顕わすは孝の終なり」という孝経の一句に接してますます発奮するのだが、こうして青雲の志を抱いた岩波は、十七歳の春、『日本人』や『日本新聞』に拠って国体観念を喚起しつつあった日本中学校校長の杉浦重剛に宛て、東京遊学への綿々たる封書を送った。この「杉浦重剛先生に奉る書」は、のちに同中学校で発見されて四十年後に岩波の手に戻ったが、それは「謹呈ス我大日本

ノ教育家 杉浦先生閣下 茲ニ信陽ノ一寒生泣血頓首再拜シテ自己ノ境遇ヲ述べ胸中ヲ吐露シテ敢テ閣下ニ請願スル所アラントス」という書出しにはじまって、「我ヲシテ書生タラシメヨ 先生許可セラルルヤ否ヤ……先生豈ニ許サルノ理アランヤ」といった末尾にいたるまで一方的な心酔の念の吐露であり、しかも文中、天下國家を論じ、西国立志篇や陽明学に説き及び、世の博学才子を罵るなど、田舎の一少年にあるまじきしろものであった。作家の村松梢風は、その晩年に岩波をかなり批判的に論じた文章のなかで、「此の『杉浦重剛先生に奉る書』は少年岩波の面目躍如たるもの」だと述べているが（『日本の出版人——岩波茂雄・島中雄作・野間清治——』『新潮』一九五一（昭和二十六）年二月号）、岩波自身、当時の心境が晩年までほとんど変わっていない旨をのちに語っている（前掲「回顧三十年感謝晩餐会の挨拶」）。

こうして岩波は諏訪実科中学を卒業すると同時に上京して、強引に日本中学校に入学した。その折には、「男子志を立てて郷関を出づ」の声に送られて郷里を出立したという。

日本中学校を卒業したのちの岩波は一高を受験して失敗、この失意の時期に内村鑑三に出会っているが、翌年には再び挑戦して一高入学を果たした。ここで阿部次郎、石原謙、上野直昭、荻原井泉水、旭山秀夫らを知り、落第して二度目の二年生のときには終生の友、安倍能成らを知ることとなった。これらの友人こそ、郷里の同窓で高名な気象学者となった藤原咲平らとともに、のちの岩波書店

を支えた群像でもあった。一高で岩波はボート部に入り、また、足尾銅山鉱毒事件にも関心をもって現地見聞にも出かけたりしたが、二年生に進級した頃から彼は、すでに單純に立身出世、功名富貴を求めた熱血少年ではなくなっていた。北村透谷やトルストイを愛読したのは、「いわゆる人生問題が青年の最大関心事で、俗に煩悶時代ともいわれた頃でありまして」という岩波自身の言葉（前掲「回顧三十年感謝晩餐会の挨拶」）が示すように、「人生とは何ぞや」を問いつめた当時の一高生の風潮に染まったともいえるが、親鸞上人の教えを説いた求道学舎の近角常観のすすめでトルストイの『我が懺悔』を読み、「信仰なきところに人生なし」の言葉を発見したことは彼に大きなインパクトを与え、「思想上の一転機」になったと岩波自身も告白している。

こうして岩波の煩悶時代が始まり、「慷慨悲憤派」から「瞑想懷疑派」へと転ずるのだが、そのようなき、明治三十六（一九〇三）年五月、一高の一級下で岩波よりも五つも年少の藤村操が「巖頭之感」を残して華嚴の滝に投身自殺した事件は、当時の社会に大きな反響を呼び起こした以上に岩波に深刻な衝撃を与えた。

彼は房州へ聖書を携えて放浪し、また学業を放棄して信州野尻湖上の弁天島に約四十日もこもり、自然の懷にあって独り煩悶したのである。もともと当時二十二、三歳であった岩波がここまで思いつめた背景には、彼の失恋という原因があったようである。安倍能成はこの点について、「岩波は自分

の戀した女が、同級同郷のはやく故人となつたYを愛して居たといふこと、又その思ひが歸省の途上で起つた、といふことを私に語つたことがある」(前掲『岩波茂雄傳』五八ページ)と述べている。このいわば片想いとしての失恋体験は岩波の生涯に大きな痕跡を残したようであり、のちのヨシ夫人とのかなり強引な結婚と家庭生活の不和、そして岩波の晩年に至るまでの派手な女性関係の伏流になっているようにも思われるが、彼の野尻湖生活は、暴風雨の深夜、孤島に彼の安否を尋ねて学業に戻るよう必ず死に懇願した母親の温情に接して終りとなり、彼は一高に戻ってきた。しかし、ほとんど授業に出ず二年続けて落第したために一高は除籍されたが、翌年には東京帝国大学哲学科選科に入学した。この学生時代に下宿先の娘ヨシに求愛して結婚、二年後には大学を卒業したが、岩波はその直前、彼を「深い絶望と自殺病」から救ってくれた母を亡くしている。岩波は何も報いることなく失つた母親を「涙なくして母を思うことはできない」と終生語っていた。

こうして起伏の多い青春時代を過した岩波は、大学卒業後の女学校教師の職には満たされず、同じ信州人の先輩として新宿・中村屋の相馬愛蔵夫妻を尋ねたりした末に、大正二(一九一三)年八月五日、彼三十一歳のときに当時の慣行を破って古本正札販売を標榜、それを断固実践した岩波書店を開業したのである。翌大正三(一九一四)年には、出版も手がけ、処女出版、夏目漱石の『こゝろ』が刊行され、ここに岩波書店は着実な第一歩を踏み出したのであった。

ところで、以上において岩波の少年期から青年期にかけての足跡をかなり詳しく追つたのは、私自身の青春時代を顧て、岩波のたどった日々があまりにも身近に感じられたからでもあるが、岩波はその晩年にいたるまで、彼の青春時代とほとんど変わるところのない精神において生涯を貫いたからである。

このような岩波茂雄のユニークな個性に導かれた岩波書店は、岩波在世中の三十四年間にわたって、刊行物の質の高さにもかかわらず營業的にも収益を重ねるといふ画期的な成功を収めた。漱石の『こゝろ』を処女出版した翌年の大正四(一九一五)年には、阿部次郎、安倍能成、上野直昭ら一高時代以来の友人や西田幾多郎らの協力で『哲学叢書』を刊行、大正十一(一九二二)年には、寺田寅彦、石原純らの協力を得て『科学叢書』が発行され、この間、『夏目漱石全集』(大正六(一九一七)年)の刊行、雑誌『思想』の創刊なども相次いだ。

古本屋として出発した岩波書店が正札定価販売を断固貫いたことによって、出版・書籍業界の積年の因襲を打破し、業界の体質改善と近代化・合理化に貢献したことはすでに見たが、岩波茂雄の出版理念は、みずから「文化の配達夫」に徹すると同時に、図書はあくまでも「耐久文化財」でなければならないという精神に立脚していたことである。このような理念こそ、昭和二(一九二七)年の岩波文庫創刊を支えたものであり、その発刊の辞で岩波は、こう述べている。「近時大量生産豫約出版の

流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬金の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである」(『讀書子に寄す——岩波文庫發刊に際して——』)。この激烈な言葉は、そのまま岩波の出版理念の闡明であり、「當時の流行に対していかに私が反撥心を持ったかがわかる」(『岩波文庫論』 前掲『出版人の遺文』所収)と岩波自身が回想しているように、それは改造社版『現代日本文學全集』にはじまるいわゆる円本の流行に見られる出版界の安易な風潮への激しい批判でもあった。右の岩波の言葉は、現在のわが国出版界にたいしても、そのまま当てはまる批判ではないか。

こうして岩波書店は岩波在世中、一貫した理念を追求し、また、岩波が若き日から秘めていた教養主義の普及にかんしては、昭和十三(一九三八)年に「岩波新書」の發行に踏み切ったことによって実現された。

ここに見られるような言論界の演出者としての岩波の成功の原因を安倍能成は、「岩波がかつて、『本を読んで居ては本は出せないよ』といった如く、彼が學者でなく、勤に従つて大體を大ざっぱにつかんだのに基づくであらう」(前掲『岩波茂雄傳』三〇〇ページ)と述べているが、その評価はさすが

に正鵠を射たものである。こうして大筋をつかんだ岩波は、原稿の依頼から印刷、製本、造本にいたるまで十全の氣をくばり、また、彼は実に細心に著者や友人の面倒をみたり、愚直にしていた料亭、銀座の「濱作」などにしょっちゅう彼らを招いて酒食を供したりした。このようにして彼は六十四歳八カ月の生涯を終始太く強く、そしてまたその風貌とは裏腹にいつも忙しそうに「せかせかとして」生きつづけたのであった。

ところで、岩波が最晩年にいたり、終戦直前の昭和二十(一九四五)年春、東京大空襲下にあつて多額納稅者議員補欠選挙に立候補して当選、貴族院議員となったこと、翌昭和二十一(一九四六)年二月に、親友の安倍能成文部大臣から文化勲章を受けたことなどから、岩波の「俗物性」を批判する向きもないではない。

たとえば、村松梢風は、「彼は氣性の激しい人で、社員に用事を云ひ付けても、云ひ付けられた社員が即座に驅け出さないと氣に入らなかつた。

けれども一面保身術にも長じてゐた。戦時中自由主義の出版社は皆軍部の壓迫を蒙つて、軍部に屈従したり、迎合したりする中で、岩波にも其の壓力が加はらないわけではなかつたが、彼は巧みにそれを躲して、大して睨まれもせず、昭和二十年三月には、多額納稅議員の補缺選挙で貴族院議員になつたりした。終戦後、操觚界の有力者が大部分追放された時代にも、彼一人は風馬牛であつたばかり

でなく、反対に、二十一年二月には、出版業者として初の文化勳章を授けられた。尤も時の文相は安倍能成だったからまるでお手盛の観があつた。これに對して安倍は『此の案は前文相の時に与されたもので、自分はそれを實現したに過ぎない』と言ひ譯をした(前掲『日本の出版人——岩波茂雄・島中雄作・野間清治——』と手厳しく断じている)。

このいかにも村松らしい発言は、「良書は必ずしも岩波ばかりが出すのではないことを讀書人は認識する必要がある」(同)との発言とともに、岩波個人および岩波書店に向けられたもつとも強い批判だといえようが、岩波自身、時効により免訴になったとはいえ、昭和十五(一九四〇)年三月には『古事記及日本書紀の研究』など一連の津田左右吉の著書出版で当局から起訴され、昭和十七(一九四二年)五年には禁錮二年(執行猶予二年)の一審判決を受けているのだから、村松の言うように「大して睨まれもせず」というのは当たらないにせよ、たとえば『日本資本主義發達史講座』刊行などにかんじて、事前に当局と連絡するなど慎重かつ十分な配慮を怠らなかつたことは事実であつた。

ところで、貴族院議員にかんしては、安倍を含む岩波周辺や小林男、長田幹雄らの岩波書店内部の者もその出馬に賛成ではなかつたけれど、ひとり岩波は熱心で、大變ハッスルしていたという。このことは、「陳者野生儀明治の聖代に生れ秀麗なる山河に育ち日夕五箇条の御誓文を拝誦し、維新の志士殉国の精神を追懷して其の感激に生くる者、不敏不才乍らも一臣子として君國に報いんとする一片

の赤心に至つては敢て人後に落つるを潔しとせざる者に有之候」という岩波の立候補挨拶状によつても明らかであろう。こうして、岩波はその晩年に到つて、かつて青雲の志を抱き立身出世を夢みた熱血少年の時代へと再び回帰していったのではなからうか。

文化勳章にかんしては、谷川徹三氏が最近、前掲の小伝「岩波茂雄」のなかで「その推薦者は世間ですべているような安倍さんでなく、伊沢多喜男氏(審視総監、枢密顧問官)であつたことを小林男の前引『惜襟莊主人——一つの岩波茂雄伝——』は明らかにしている」(『讀賣新聞』一九八五年四月十二日付)と述べている。もつとも小林男の著書では、本当の推薦者は、岩波が「或る点では輕蔑しながらも大切にしていた」という郷里の先輩、「伊沢多喜男であつたという」と書かれていて、谷川氏が言うほど明確に断定しているわけではない(前掲『惜襟莊主人——一つの岩波茂雄伝——』三六七、三七六ページ)。一方、当事者の安倍能成はみずからの関与を否定し、「伊沢多喜男は自分が幹旋者だといつて居るが間違はあるまい」(前掲『岩波茂雄傳』四〇一ページ)と語っている。

いずれにせよ、岩波が文化勳章に十分値する偉大な業績を残したことは否定できず、また、岩波自身、受章の内示を知つて一人は拝辞したというけれど、「只の賞などほしくはないが、文化勳章なら貰いたい氣もした」と小林男に語つていたとおり(前掲『惜襟莊主人——一つの岩波茂雄伝——』三六六ページ)、本当はこの受章を心から喜んでいたのであつた。にもかかわらず、それを拝辞した旨を綿

綿と綴り、一方でその喜びと光栄を記し、同時に長々と自分史を回顧した挨拶状(その口述の筆記者は、当時中学生の羽仁進氏であったという)を送っているのは、いかにも岩波らしい自己表出であった。このことはまた、みずからの死が近いことをあるいは予期していたのではなかったか。小林男は、「この長い挨拶状を見て『たびたび聞いたことをまた書いています。歯切れが悪いのは病気のせいではないか』と心配した人があった(同前番 三七二ページ)とさりげなく記しているが、この時期の岩波にかんしては、周辺の近い人びとはいささかもてあまし、辟易していた感もなくはない。安倍能成は、「店員の一人が彼に『獨善院他力本願居士』の尊號を奉ったさうだが、彼の熱心な凝り方、先輩や友人に對する奉仕が、結果から見ても、店員やぐるりの者に委譲した他力本願にならなかつたとはいへない。彼は思ひやりがあるやうで、否思ひやりがあると共に、傍若無人の暴君でもあつた」(前掲『岩波茂雄傳』四九一ページ)と描写している。この点については、岩波がとくに可愛がったという三女・美登利さえ安倍能成に宛てた私信のなかで、「父といふことは絶えざる緊張でした。いやではありませんが、たえず父にも氣を配り、サービスし、疲れました」(前掲『岩波茂雄傳』四八三ページ)と語っていることもつけ加えておこう。

だが、このような性格そしてとくにその頑冥な晩年こそ、いかにも岩波らしいところであり、貴族院議員になりたがったり、文化勲章をほしがったりした点を含めて、それは愛すべき頑固爺また好々

爺の姿でもあり、田舎育ちの信州人のコンプレックスの裏返しであつたともいえよう。

こうして岩波は、貴族院議員として初登院した日の前日、波風の絶えなかつた岩波家にあつて病弱ながら秀才であつた最愛の長男・雄一郎を三十歳で失い、その八ヵ月後には岩波自身も彼がみずからの好みで丹精をこめて建てさせた熱海伊豆山の別荘——惜機^{せき}荘でその生一本な生涯を閉じたのである。

「非岩波化」と岩波書店

生涯にわたって岩波茂雄のもっともよき理解者であつた安倍能成は、岩波の人物像を「私は岩波の理想に對する情熱、利害を無視する公的精神については、天下の學者、文學者、いはゆる文化人中、彼に匹儔する者は殆ど無いことを斷言して憚らない」(前掲『岩波茂雄傳』四〇二ページ)と総括的に評定している。ここに言う「利害を無視する公的精神」は、「良い物を出す爲には、全く費用のある無しなどは念頭になく、唯遮二無二自己の計畫を推し進めようとするが如き、猪突無謀の君子人」(夏目伸六「岩波茂雄さんと私——世にも面白い男のはなし——」『文藝春秋』一九五七年三月号)であつた岩波を一貫して支えてきた一つの重要なバックボーンであつた。この「公的精神」は当然、マルクス主

義にかんしても適用され、「人類思想界の一潮流とすべきマルキシズムを紹介することは絶対に必要である」(前掲「回顧三十年」)との立場こそ、『日本資本主義發達史講座』の出版に踏み切った原点であった。それだけにまた岩波は、「講座執筆者には出来るだけ公平な立場をもって広く学界の権威者を網羅されたき」という注文を同時につけることも忘れなかった(『日本資本主義發達史講座』刊行の次第「前掲『出版人の遺文』所収」)。

一方、岩波がこうした公平さの持ち主であったからこそ、皇国史観の重鎮、裴田胸喜にかつて激しく弾劾されたにもかかわらず、敗戦直後にその裴田が自害したことを知って、「同君とは根本的に主張を異にしているが、当年軍閥に迎合し、今また民主主義を謳歌している徒輩に比べれば、裴田君は自己の主張に殉ずる忠實さを持っていた」(前掲「回顧三十年」)と語ることができたのである。

このような「公的精神」を堅持した岩波は、周辺に綺羅星のごとく当代最高の知性を集めながら、いわば徒党をつくったり、政治・思想運動的なサロンの形成を組織化するということを決してしなかった。同郷の友人でもある藤原咲平は、「自分はこの岩波さんの会で、いろいろな方と知り合いになる機会を得た。安倍能成さん、小宮豊隆さん等々。斎藤茂吉先生、土屋文明先生等々その他大勢あった。それらの方々はすべて高邁清純な方々で、いずれの場合にも、私利私慾のためとか、徒党を作って政治運動に資するとか、利権を求めるとかいう空気は毫末もなかった」(「故岩波茂雄の思い出」『図

書』第九五号 一九五七年)と語っている。

ここに見た非政治性・非党派性こそ岩波茂雄が立脚した「公的精神」の具体的なあらわれであったといえよう。それだけに、岩波亡き後の戦後の岩波書店が歩んだ道は、果たして岩波の立場を継承しているのが、この点からも問われなければならないまい。

一九四九(昭和二十四)年に発足した平和問題談話会は、いうまでもなく、一九五〇年の対日講和問題から一九六〇年の日米安保条約改訂問題などにいたるまで、戦後日本の重要な政治課題にかんじて、「もう一つの文部省」(大宅壮一)とさえ呼ばれていた岩波書店が組織した、いわゆる進歩的文化人中心の政治・思想運動の母体であった。しかも安倍能成らリベラル保守の巨頭を同会の象徴的指導者に据え、それに大内兵衛、末川博らマルクス主義陣営の重鎮を加えながら、その実質的な推進役は、清水幾太郎、久野収、都留重人、中野好夫、名和統一、丸山真男、宮原誠一、辻清明らのいわゆる進歩的文化人であった。やがて六〇年安保の時期には、坂本義和、日高六郎、加藤周一、石田雄、小林直樹、福田欽一、篠原一、荒瀬豊ら一世代若い丸山学派ないしは市民主義の立場の知識人が岩波サロンに集まって、平和問題談話会の活動を引き継いでゆく。

だが、このような軌跡こそ、岩波茂雄の「公的精神」や非政治性・非党派性からの著しい逸脱であり、また岩波書店の「非岩波化」にほかならなかったといえよう。

にもかかわらず、今日の岩波書店の指導層がそのことを無視して、このような「非岩波化」こそが岩波書店本来のあり方であるかのようにはば論じていることは、岩波茂雄の「公的精神」に照して、首肯しがたい問題点だといえよう。しかも「平和問題談話会の組織に当っては、吉野さんがおられたからこそできたのだと誰もがいわれます」（緑川亨「平和問題談話会とその後」へききて 安江良介、『世界』創刊四十年記念臨時増刊「戦後平和論の源流——平和問題談話会を中心に——」一九八五年七月）と、この点での吉野源三郎の功績を岩波書店の現社長が大いに称えているだけに、まさに「非岩波化」の推進者は、吉野源三郎をおいてないという結論が導かれるのである。

ここで私のような部外者が、岩波亡き後の岩波書店の内情に立ち入ることはもとよりできない。だが、記された文章や資料を読むかぎり、岩波とはとくに晩年しっくりゆかなかったけれども岩波がその献身的な努力にたいしては最後まで感謝の念を持ちつづけた岩波書店の陰の存在で実質的には経営の大黒柱であった岩波書店の大番頭、堤常支配人・堤久子会計主任夫妻と小林勇、長田幹雄ら他の岩波書店幹部との角逐のうち、岩波書店は、小林勇、長田幹雄を中心に経営されることとなった。こうした小林・長田体制下において編集長となり、岩波書店のいわば「政治局（ポリト・ビュロー）」を担うようになったのが吉野源三郎であった。吉野は昭和十二（一九三七）年に岩波書店に入店した東大哲学科出身のマルクス主義に関心の深い逸材で、「店の主要員中では、栗田賢三とともに数少ないイ

ンテリであつた」（前掲『岩波茂雄傳』二九四ページ）。

戦後の社会的激動は、堤、小林、長田ら小学校出の非インテリでありながら岩波茂雄に共鳴して徒弟奉公からたたきあげた、いずれも信州人の集団から成っていた岩波書店の変容をよぎなくさせたともいえようが、昭和二十四年四月二十五日の岩波書店の株式会社化とともに発足した吉野源三郎編集長体制こそは、岩波書店の「非岩波化」そして「非信州化」の制度的完成であったともいえよう。また、このことは、岩波茂雄の岩波書店から進歩的文化人集団の岩波書店への転換をも意味し、岩波書店から信州人的なロマンとリベラリズムつまり「茂雄さ」らしさが潰え去ってゆく一大転機でもあった。先に見た平和問題談話会の発足が、この同じ年月であったことは、きわめて象徴的である。

このように記せば、戦後岩波書店の看板となった雑誌『世界』（岩波の死の直前、一九四六（昭和二十一年）一月に創刊）の発展こそ、岩波の遺志であったとの反論もあり得ようが、その『世界』の創刊に際しては岩波茂雄が、「幸ひにして同志安倍能成氏あり、萬幅の信頼を以つて『世界』の編輯を一任する」（『世界』の創刊に際して）と書き、すべてを安倍に託しているにもかかわらず、やがて『世界』の編集主導権は書店側の吉野源三郎に移っていった。従って、現社長の緑川亨氏が「吉野さんは、戦後日本の激動の中で、総合雑誌としての『世界』の編集を岩波茂雄氏に託されるわけです」（前掲「戦後平和論の源流——平和問題談話会を中心に——」）と語っているのは、岩波書店史とも背馳した「非岩波

化」路線の言葉のうえでの正当化でしかないであろう。そして、この間の事情を安倍能成は、次のように語っていることを指摘しないわけにはゆかない。

「時代の激しい變遷や、編輯者吉野との考へかたの相違その他から、二三年の中に我々と『世界』との關係は次第に疎くなり、我々は主動者でなく寄稿家になり、その關係もだんく薄れて来て、我々の仲間は武者小路實篤を主とした生成會を作つて、『心』を發刊するやうになつた」(前掲『岩波茂雄傳』二八一―二八二ページ)。

このつつましくも含蓄の多い表現こそ、温厚な安倍が岩波亡き後の岩波書店から刊行する『岩波茂雄傳』のなかに記し得た最大限のへ異議申し立てVであつたといえよう。

こうした経緯を閲して今日、もっとも岩波茂雄的でない雑誌『世界』が創刊四十周年を迎えているのだ、といったら言い過ぎであろうか。

ここで最後に、いわゆる「岩波文化」それ自身にたいしても不満であつたマルクス主義史家たちによる「岩波文化」と「講談社文化」の対比というかつて話題を呼んだ論点にも言及せざるを得ない。遠山茂樹・今井清一・藤原彰共著『昭和史』(岩波新書 一九五五年)は、日本の戦前の文化が國民の圧倒的部分に受入れられていた娯樂中心の「講談社文化」と國民の小部分の文化人に限定されていた「岩

波文化」に分極化し、「この両者の間にはまったく通路をもたぬ断層があつた」ことが、「ファシズムにたいする國民的抵抗の武器を生み出すことのできぬ理由であつた」と述べている(同書 八九ページ)。この点について安倍能成は、「第一に講談社のやり方には、岩波自身も生前反對の意を表して居たが、これは讀者本位といふ民衆的な態度といふよりは、民衆を相手にして金を儲けようとする露骨な商賈主義で、岩波の著者を大事にして讀者に媚びず、しかもこれに奉仕することを終始心がけたのとは違ふ」(前掲『岩波茂雄傳』二九八―二九九ページ)と、当然のことながら「岩波文化」を擁護し、一方、「講談社文化」には嫌惡の感情を露わにしている。

私自身は、いまあえて「岩波文化」と「講談社文化」というカテゴリー化にたいしても、その評價にかんしても立ち入るべき理由をもたないので、「岩波文化」の現在が山口昌男や大江健三郎らの「ファッションナブルなへ知」の集團を擁して「讀者に媚びず」とはともいえないであろうこと、「講談社文化」の現在が、もしも「露骨な商賈主義」に立脚しているのだとしたら、私のこの岩波茂雄論などは、どうして活字にはならないであろうことのみを記すにとどめたい。同時に、『昭和史』の著者のイデオロギー史観は、知識や學問がいまや解放たれている現在の日本社会にはますます無縁なものになりつつあると云つてよいのではなからうか。

渡部昇一(わたなべ しゅういち) 評論家、上智大学文学部教授。昭和5年、山形県生まれ。昭和30年、上智大学大学院修士課程修了。ミュンスター大学、オクスフォード大学留学。Dr. Phil. [著書]『英語学史』『言語と民族の起源について』『漱石と漢詩』『ドイツ参謀本部』『日本語のころろ』『英語教育大論争』『ことばの発見』『知的生活の方法』『英語の語源』『秘術としての文法』『レトリックの時代』など。

中嶋嶺雄(なかじま みねお) 東京外国語大学教授。国際関係論・現代中国学専攻。昭和11年、松本市生まれ。昭和35年、東京外国語大学中国科卒業。昭和40年、東京大学大学院国際関係論課程卒業。社会学博士。[著書]『現代中国論』『中ソ対立と現代』『逆説のアジア』『北京烈烈』『中国』『知識人と論壇』など。

松井利彦(まつい としひこ) 俳句評論家。昭和2年、岐阜県生まれ。昭和36年、名古屋大学大学院国文学修了。岐阜教育大学教授を経て、現職。[著書]『近代俳論史』『近代俳句研究年表』『正岡子規の研究』(上下)『子規・虚子・漱石』『定本高濱虚子全集』(編) など。

牛山純一(うしやま じゅんいち) ㈱日本映像記録センター社長、日本映像カルチャーセンター常務理事。昭和5年、東京生まれ。昭和28年、早稲田大学第一文学部卒業。同年日本テレビ入社。報道局社会部長、製作局次長を歴任して現職。芸術選奨文部大臣賞、日本記者クラブ賞を受賞。

本間長世(ほんま ながよ) 東京大学教授。アメリカ研究。昭和4年、東京生まれ。昭和28年、東京大学教養学

部教養学科卒業。[著書]『リンカーン』『理念の共和国』『アメリカ政治の潮流』『アメリカを支えるアメリカ人』など。

小谷正一(こたに まさかず) プロデューサー、コンサルタント。大正元年、兵庫県姫路市生まれ。昭和10年、早稲田大学文学部卒業。大阪毎日新聞、夕刊新大阪(創刊)、新日本放送(創設)、大阪テレビ(創設)、電通等を経て現在デスクK代表。バシフィック・リーグ設立(昭和24年)、オイストラップ招聘(30年)、大阪万博住友館プロデューズ(45年)、東京国際映画祭プロデューズ(60年)など、本邦初のプロデューズ活動多数。年間最優秀プロデューサーを連年主筆(58年から)。[著書]『おもろい奴ちゃん』(共著) など。

半藤一利(はんどう かずとし) 文藝春秋編集委員長。昭和5年、東京生まれ。昭和28年、東京大学文学部国文学科卒業。同年文藝春秋入社。『週刊文春』『文藝春秋』の各編集長、出版局長を経て、現職。[著書]『聖断——天皇と鈴木貫太郎』『日本海軍を動かした人びと』『日本のいちばん長い日』『レイテ沖海戦』など。

言論は日本を動かす―⑦

【言論を演出する】

定価―一八〇〇円

昭和六十年十一月二十五日 第一刷発行

編者―柏谷一希

発行者―野間惟道

発行所―株式会社講談社



〒一〇二 東京都文京区音羽二―一二二
電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

編集―株式会社講談社出版研究所

代表 長谷川喜市

〒一〇二 東京都文京区小日向四―六一九 共立会館
電話 東京(〇三)九四三―二六一三

印刷所―凸版印刷株式会社

製本所―黒柳製本株式会社

©柏谷一希ほか・一九八五年 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。